

示教に待つて補訂の機を得たい。

時代に伴ふ漢字音の變遷の跡を究めることが單に音韻の學問の上に於てのみならず、諸種の東洋の學問の研究上至要の事たるは今更言ふを須るない。従つて此の方面の研究は内外の學者に依りて熱心に從事せられ、其の結果も相次いで發表され、特に輓近著しい進歩を示すに至つたのは快心の極である。併しながら此等の研究の結果には、學問の性質上致し方無いことゝはいへ、各々多少の臆斷を伴つて居るのは事實である。此の際斯學の一段の進境を示す爲に最も必要な條件は、一つでも多く新なる資料を獲て從來の推測を事實に據つて證明し、若くは之を改むる事であらねばならぬ。自分が今此の對音千字文を譯載するのは、當面の研究家の爲にかゝる意味で一個の資料を提供するに外ならぬ。蓋し古い漢字音を今日からすれば、研究上非常に困難なる漢字の反切や、若しくはその同音の文字で與へた音解の外に、音標文字で正しく寫し出した資料は甚だ稀であつて、偶々存するあれば比較的後世のものである。日本・朝鮮・安南等に傳へらるゝ漢字音が字音研究家に尊重せられる所以は全くこゝに在る。然らばこゝに西藏文字で寫された漢字音は何時のものであるか。此の事は此の資料の價值を定める上に於て最も緊要の事であるが、併しながら斷簡には書寫の年月も無ければ、無論音寫を施した時代も記されて居らず、また文字の缺劃等に依つて書寫の時代を推すべき便宜も無い。従つて的確に此の問題を解決すべき方法は無いが、唯前に述べた如く、之が敦煌の佛洞から出たものであることは、その宋初以前のものなることを證するに於て殆ど全く疑無い。此の事實を基礎にして更に其の上に我輩の推斷に資し得る點は其の書體である。ペリオ氏やスタイン氏の敦煌の同一